

特別支援学校（聴覚障害）の乳幼児教育相談における保護者支援

～「週の記録」に記述された母親の不安や疑問に焦点を当てて～

吉野 賢吾

本校の乳幼児教育相談では、母親一人一人に対して「週の記録」のやりとりを通した支援を行っている。この「週の記録」には母親の迷いや不安、疑問などが記述されていることがある。この報告では、本校乳幼児教育相談に通う6組の母子を抽出し、母親が「週の記録」に記述した迷いや不安、疑問などについて整理、検討することにした。その結果、母親は具体的にどのような不安や疑問をもつのか、母親は不安や疑問を子どもの成長する過程のどのような時期に抱きやすいのか、ということについて把握することができた。そして本校乳幼児教育相談担当者は、そのような不安や疑問をもつ母親たちの姿を肯定的に受けとめ、認めながら支援を行っていることが確認できた。

キー・ワード：乳幼児教育相談 母親支援 週の記録 母親の不安や疑問

1 はじめに

本校乳幼児教育相談（以下、本校乳幼と記す）では母親一人一人に対して、「週の記録」のやりとりを通した支援を行っている。家庭での子どもの様子、母親が子どもとかかわる上で心がけたこと等を「週の記録」の用紙に記入して提出してもらっている。この「週の記録」には母親の迷いや不安、疑問等が記入されていることがあるため、それらに対して個別指導を担当する担当者がコメントを記入して返却している。「週の記録」に記入されている母親の不安や疑問を把握し、それに対して本校乳幼の担当者がどのような支援を行っているのかについて整理することで、乳幼児教育相談において、子育てに不安を抱いている母親に対する支援のあり方について検討できるのではないかと考えた。

2 目的

本研究ではまず、母親の不安や疑問に対して、本校乳幼の担当者が「週の記録」にコメントを残すことや、懇談等の場で母親と話し合うことで行っている支援の内容について整理する。そこから乳幼児教育相談における子育てに不安を抱いている母親に対する支援のあり方について検討する。

3 方法

(1) 対象とする母子

本校乳幼に0歳児期から2歳児期にかけて継続して支援を受けている母子の中から以下の観点をもとに6組の母子を抽出する。

- ①子どもの年齢による支援内容の違い等について検討するため、0歳児から本校乳幼で支援を受けている母子を抽出する。
- ②子どもの聴力による違いを検討するため、0歳児の時点で子どもが中等度難聴、高度難聴、重度難聴であった母子を抽出する。（中等度2組、高度1組、重度3組）
- ③子どもが装用している補聴機器による違いを検討するため、子どもが補聴器を装用している母子、及び子どもが人工内耳を装用している母子をそれぞれ同数ずつ抽出する。

(2) 記述の抽出と分類

以下の例のように、「週の記録」の中の母親の記述と担当者のコメントを、その時の子どもの年齢とともに抽出する。さらにその中から母親の迷いや不安、疑問が含まれる記述とそれに対する担当者のコメントを抽出する。抽出した記述やコメントを、内容が共通していると思われるものを項目として分類する。

抽出した記述の例

母親の記述（0歳5ヶ月）

感情とともに声が出ていると思い、たくさん笑わせたり、母と表情豊かに接するようにしました。

担当者のコメント

お母さんとのやりとりがもっと大好きになりますね。豊かな表情は、お母さんの気持ちをわかりやすく伝える手段、素晴らしい手段ですね。

母親の不安や疑問が含まれた記述の例

母親の記述（1歳1ヶ月）

保育所から帰ると、私にベッタリくっついてきて、家事もなかなかできなくて困ります。側を離れたり、自分の思い通りにいかないと泣いたりして自己主張してきます。

担当者のコメント

大好きなママとずっと一緒にいたいんですね。自我が出てきました。これも成長です。

(3) 分類した記述をもとにした、望ましい支援についての検討

上記（2）で分類した項目に「聞こえについて」「母親の子どもへのかかわりについて」等の項目名をつける。これらの記述の内容と数をもとに、以下の4点について検討する。

- ①聴覚に障害がある乳幼児の母親は具体的にどのような不安や疑問をもつか
- ②母親の不安や疑問は子どもの成長する過程のどのような時期に抱きやすいのか
- ③子どもの聴力によって抱きやすい不安や疑問に違いがあるのか
- ④子どもが装用する補聴機器によって違いがみえてくるのか

そして、聴覚に障害がある乳幼児の母親が抱く不安や疑問に対して、本校乳幼で実践してきた支援の内容をもとに、乳幼児教育相談を担当する者が行える望ましい支援について検討する。

4 結果と考察

「週の記録」より抽出した記述の内容と数をもとに検討した結果、子どもの年齢や本校乳幼で支援を受けた期間にかかわらず、「ことばの育ち」「兄弟姉妹とのかかわり」等に関する不安や疑問を母親は抱いていることが分かった。また、子どもが成長する過程で「補聴器、人工内耳の装用習慣」「子どもの自己主張と『イヤイヤ期』『ことばかけ』等に関して、母親が不安や疑問をもつことがわかった。

本報告では、「ことばの育ち」「補聴器、人工内耳の装用習慣」「子どもの自己主張と『イヤイヤ期』」に焦点を当てて考察する。

(1) ことばの育ち

聴覚に障害のある子どものことばの獲得において、本校乳幼では子どもの「表出面」よりも「受容面」の育ちが大切であると考えている。話されたことばを確実に受けとめ、理解した上で行動する、応答するという姿を認め育てたいと考えている。そのため、子どもとやりとりをする際に担当者は子どもの「受容面」に意識を向けていることが多い。また母親と子どものやりとりに関する支援においても子どもの「受容面」を大切にしたアドバイスや働きかけを意識して行っている。聴覚に障害がある子どもの母親のほとんどは「早く話せるようになって欲しい」「もっと上手に話せるようになって欲しい」という気持ちが強い。そのため、子どもの発声や発話という「表出面」に母親の意識が向きがちになってしまうようである。

このように、子どものことばの成長において担当者の思いと母親の意識に差があることを認識したうえで、今後、子どもの「受容面」の育ちや子どもが「理解」することの大切さについて、「週の記録」のコメントだけではなく、個別指導の中でより具体的にわかりやすく母親に伝えていくことが必要であると考え。また、子どもの「受容面」を大切にしたかかわり方を、グループ活動の中で担当者がモデルを示しながら母親に伝えていく必要があると考える。

聴覚に障害がある乳幼児に話しかける際、写真カ

ードや身振り、手話単語等の視覚的な補助手段を活用することは大切なことである。聴覚に障害がある乳幼児にとって、母親から話しかけられることばは、補聴器や人工内耳を通して聞き取りにくい、まだ頭の中の意味とつながっていない、等の理由から曖昧な情報となってしまう。そこで母親が話しかける際に見てわかる手段を補助的に使うことで情報が伝わりやすくなり、子どもも話しかけられたことがわかったことを実感しやすくなる。この子どもがわかったことを実感することが重要になる。本校乳幼では、母親から話しかけられたことがわかるという経験を積み重ねていくことで、母親から話しかけられることがわかることは当たり前、という感覚をもった子どもに育てたいと考えている。この感覚が育っている子どもは将来、母親や身近な大人から話しかけられたことがわからないという状況に接した際、怪訝な表情を浮かべたり、首を傾げたりする仕草をするようになる。その様子を見た大人は話しかけを子どもがわかっていないと判断し、再度話しかけたり、視覚的な補助手段を使ったりして子どもにわかるように配慮する。その結果、子どもは話しかけられたことを理解することになる。このことを本校乳幼の担当者は「わからないことがわかる」と表現して母親たちに伝えている。日頃母子で曖昧なやりとりをしていると「わからないことがわからない子ども」に育つ可能性がある。目の前の子どもを「わからないことがわかる子ども」に育て、そのことが聴覚に障害がありながら確実なコミュニケーションをする大人に育つことにつながることを伝え、話し言葉とともに積極的に視覚的な補助手段を活用することを母親たちに勧めている。そして視覚的な補助手段を担当者が実際に活用し、子どもがその情報を受け取っている姿を、母親にモデルとして示すように心がけている。

(2) 補聴器、人工内耳の装用習慣

乳幼児が補聴器の装用を嫌がることは珍しいことではない。自分で外して口に入れてしまう、時には自分で分解してしまう等の行為をして、母親を困惑

させることが多い。一度このような困惑することがあった場合、本来は子どもの顔を見て笑顔で話しかけ、一緒に遊ぶことが望ましいのだが、我が子が装用している補聴器ばかり見てしまう母親になることがある。子どもは母親が見ているものを一緒に見たいと思うため、母親の視線の先の補聴器を自分で外して見ようとする。その補聴器を母親がつけようとすると子どもが嫌がるという悪循環に陥ってしまう。

担当者は補聴器を装用する習慣がつかないまま育っていった子どもはいないことを経験的に知っているため、「そのうちに慣れますよ。」と「週の記録」にコメントすることがある。「週の記録」の紙面の関係で詳しく書くことができないためこのようなコメントになるが、個別指導の懇談の際に担当者は、「他の遊びに集中している時につけてみては？」「好きなテレビを見る時に補聴器をつけるよう誘ってみては？」等と具体的な生活場面を想定して、母親と一緒に対応を考えるようにしている。このように、補聴器ばかり気にかけるのではなく、補聴器を装用している子ども全体を母親が見られるよう、支援していく必要があると考える。また、子どもにとって補聴器の出力が強すぎて不快に感じている、もしくは弱すぎて効果を感じていないという場合も考えられる。生活の中での聞こえの様子や、聴力測定の結果等から補聴器の調整が必要であればできるだけ早く対応することが望ましいと考える。

「人工内耳」に関する母親の不安や疑問が含まれた記述もあった。この中に補聴器の装用を嫌がるのと同様に人工内耳の装用を嫌がるという内容の記述があった。子どもが人工内耳をつけたがらない場合、かわり方の工夫のみではなく、人工内耳の調整が必要な場合がある。刺激が強すぎたり弱すぎたりすることが影響していることも考えられる。しかし、人工内耳の調整は本校乳幼ではできないため、手術を行った耳鼻科の言語聴覚士にしてもらわなければならない。家での聞こえの様子や本校乳幼で行った聴力測定の結果、その子どもの声の出し方等を耳鼻科の言語聴覚士に伝え、調整の参考にしてもらうことで子どもの人工内耳の装用状況が改善される場合

もある。このような医療機関との連携も積極的に行っていく必要があると考える。

(3) 子どもの自己主張と「イヤイヤ期」

1歳頃になると子どもは、それまでは生活の全てのことを母親にやってもらっていたのが、少しずつ自分でやってみようと思ったり、自分はこうしたいと主張したりし始める。この変化に戸惑う母親は多いようである。

本校乳幼では、グループ活動の終わりに懇談を行っている。イヤイヤ期の子どもとのかかわり方については、1歳児と2歳児のグループ活動後の懇談の時間に話題になることが多い。懇談での母親たちの話を受け、担当者はイヤイヤ期の子どもへのかかわり方について次のように説明している。

「子どもの気持ちや考えを言葉にして母親が代弁することで、子どもは自分の気持ちや考えをわかってもらえたと思うこと。」「その上で、我慢させるところは我慢させ、やらせることはしっかりやらせるようにすること。」「聴覚に障害があるためわからないのではない。母親が伝えようとしている『やってはいけない』『がまんしてほしい』ということ、子どもはわかっている。」「しかし子どもは泣いて訴えてくるだろう。でも子どもは母親が自分に何を要求しているのかわかるため泣いている。」「子どもは泣きながら自分の気持ちを切り替えようとしている。子どもが『お母さんがダメって言っているから仕方ないか』と気持ちを切り替えられるまでには時間がかかる。その時間を最後まで子どもに付き合ってあげることが大切であること。」「これらのことを家庭での子どもの姿に照らし合わせながら説明するようにしている。

5 まとめ

本校乳幼では聴覚に障害がある0歳から2歳の子どもと母親に対して支援を行っている。子どもたちの個性は様々である。これは母親たちも同様であり、今回の研究で取り上げた「週の記録」においても、母親の個性が表れている。子どもの気になるところを書くことが多い母親もいれば、子どもの成長した

ところを多く書いてくる母親もいる。このような様々な個性をもつ母親が提出した「週の記録」の中に、母親の不安や疑問が含まれた記述があり、今回はそれらの記述を0歳児の時期から2歳児の時期まで縦断的に検討することができたことは意義があったと考える。

本研究では母親が抱く不安や疑問を含む記述と担当者のコメントを抽出したが、担当者のコメントを見てみると、母親の記述に対して否定的なものは見当たらなかった。担当者が母親の気づきや不安、迷い、疑問を肯定的に受けとめ、認めているためである。これは特別支援学校（聴覚障害）の乳幼児教育相談において母親への支援を行う際の基本であると考えられる。母親が「週の記録」に書いていることに担当者はコメントを記入しているが、記入するスペースが限られているため、書き切れないことがある。そのような場合、紙面でのやりとりではなく、実際に顔を合わせて話し合うことが必要になる。そのため、個別指導の時間やグループ活動の合間等に母親と口頭でやりとりをして、アドバイスをし、質問に答えるようにしている。このように、母親を支援していくために様々な場面や方法で担当者は母親とやりとりを行っている。不安や疑問をもつ母親が前向きに育児に取り組めるよう支えていくために、今回取り上げたような支援の方法は今後も継続されていく必要があると考える。

【付記1】

本研究は、筑波大学附属聴覚特別支援学校研究倫理審査委員会の審査を受けて承認を得ている。

【付記2】

本報告は、公益財団法人みずほ教育福祉財団より平成30年度特別支援教育研究助成事業の助成を受けて研究を行ったものの一部をまとめたものである。